

戦火に散ったアスリート①

もうひとりのメダリスト 硫黄島から3通の手紙

水泳・河石達吾さん

硫黄島で戦死したメダリストは、前回取り上げた馬術のパロン西だけではない。西が脚光を浴びた1932（昭和7）年のロサンゼルス五輪で男子競泳陣は6種目中、5種目を制覇。最強の競泳陣の中であって河石達吾は100メートル自由形で銀メダルを獲得した。その河石も、太平洋戦争最大の激戦地で最期を遂げている。そして映画さながらに、家族へ「硫黄島からの手紙」を3通、送っていた。

（新聞うすみ火・吉岡雅史）

口五五輪、1000m自由形で2着、58秒6の五輪タイ記録

ロス五輪で競泳競技が始まったのは現地8月6日で、河石は水泳陣のトップを切って登場した。

日本人3人、米国人3人と、まさに日米決戦となった「花形」1000自由形の決勝は、翌7日に行われた。

（スタートでトムスン、トップを切り、25分ではカリリ、シュワーツ、宮崎、高橋、河石と一斉にならび観衆に汗を握らせたが、50分ではカリリ、宮崎、頭だけ抜きターンより10分宮崎俄然ビッチをあげトムスンおくれカリリとならび90分では宮崎徹底的に勝敗を決し河石も決死の勢でカリリ、トムスンがラスト・ダッシュでもがい

ている間にタッチ見事二着となる）（大阪毎日夕刊）

タイムは58秒6で五輪タイ記録。1着の宮崎康二（浜松一中）の58秒2は五輪新という、ハイレベルのワンツ1・フィニッシュとなった。

これで勢いを得た日本競泳陣は、女子2000平泳ぎ銀の前畑秀子も含め、12個ものメダルラッシュとなった。

河石は広島島の修道中学から慶応大学に進学。五輪出場時は大学3年で、福沢論吉宅に書生として住み込んでいた。

「修道水泳史」には、原稿用紙6枚分もの寄稿文が掲載されているが、メダル獲得に関しては一言も触れていなかった。自慢話のない回顧録も珍しい。ただ、文章はおもしろく、特に選

手村の描写は傑作だった。

（自由を讃える筋骨逞しき若人が所謂一糸もまとわぬ姿ではね廻っているのを見受けます。さすが裸体体操の本場だけに向かい隣のドイツ選手が最も完全に自然に帰っています）

大学を卒業後、河石は大同電力（現在の関西電力）に入社したが、ほどなく召集された。

中国戦線で敵襲を受けた際、血気にはやって突入を試みようとした部下を「全員生きて帰るんだ。無駄死にするんじゃない」と諫めた。さらに数人の部下の上に覆いかぶさって銃弾から守ろうとしたという。

5年間の兵役を終えると、43（昭和18）年10月に結婚、神戸に住まいを構えた。2度目の召集は半年後の44年6月で、32歳になっていた。

長男誕生を喜び、妻を讃える言葉がびっしりと

「2度と生きては帰れません。後のことはくれぐれもよろしく」と兄嫁に言い残して出征。この時、輝子夫人は第一子を身ごもっていた。

陸軍中尉として独立混成第17連隊に配属されると、第1、第2大隊は父

愛息の写真を同封した手紙は宛先不明で

最後の1通は45年1月のもので、日付はなかった。12月の米軍の攻撃を「二百五十キロ爆弾で壊れたのは皿一枚」と表現するなど、家族に心配をかけまいとする気遣いで満ちあふれていた。

硫黄島の戦いは45年2月16日から始まったとされるが、すでに前年から爆撃のあったことを、河石の手紙が証明している。また、公報で河石の戦死は3月17日。大本営が玉砕と発表した日となっている。しかし、親類の調査で「5月9日まで生きていた」ことがわかった。

その名の通り、至るところでイオウが噴出する硫黄島は、火山島のため地熱が高い。水も不衛生で腸チフスが蔓延した。そんな環境で河石は、妻と息子に手紙を綴ったのである。

戦闘が激化した45年2月に、輝子さんは達雄さんの写真を3枚同封させた手紙を送っているが、「宛て先不明」で戻ってきている。河石が、愛息の顔を見ることはなかった。

造船技師にはならなかったものの、達雄さんは会社で役員まで務めた。4年前に退職すると、父の資料の整理に没頭した。

「生まれたときからおやじはいないから、私にはそれが普通のことでした。同級生も同じ状態でしたから……。社会に出て、一段とおやじの偉大さがわ



銀メダルを取ったレース直後の河石。周囲の興奮ぶりが伝わってくる



河石と輝子夫人の遺影。手前の箱には硫黄島の石が…

かりました。やっぱり、戦争は絶対やっちゃいかんですよ。おやじのような人は、母のような苦労をする人は、2度と出てはならないんです」

達雄さんはいつの日か、父の遺骨が眠る硫黄島を訪れたいと願っている。

いわみせいじの文化論 ヨコバ日記

